

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所

例 言

1. 本報告書は、宅地分譲工事に伴う剣崎東村遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市剣崎町 962 番地 1、963 番地 1・2、964 番地 1・2 に所在する。
3. 発掘調査及び遺物整理は、株式会社榛名土地・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施したものである。
4. 発掘調査から遺物整理・報告書刊行にいたる経費は、株式会社榛名土地に負担を頂いた。
5. 発掘調査および整理作業は、志村哲・春里桃子・田村貴広（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、空撮は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。調査面積は 226 m²である。
6. 発掘調査・整理作業は、平成 30 年 4 月 16 日～平成 31 年 1 月 31 日まで実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「725」である。
8. 本書の執筆はⅠ－1 を高崎市教育委員会、Ⅲ－2 を春里、Ⅱ～Ⅵを志村が担当し、編集は志村が行った。なお、遺構の写真は春里、遺物の写真は志村による。
9. 本書に関わる図面及び出土遺物等は、高崎市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査および遺物整理参加者は以下のとおりである。

【発掘調査】

岡庭秋男 岡村美弥子 北野進二 小関泰洋 佐藤開雄 永井述史 橋元裕児

【遺物作業】

小野沢絹子 樺澤美枝 合田幸子 真下弘美 渡辺博子

凡 例

1. 本書掲載の遺構図中の北方位は座標北を、断面図の水準線数値は海拔標高を示している。測量については、GNSSによる観測で、座標は世界測地系の測地成果 2011 年を用いている。
2. 遺構図の平面図・断面図の縮尺は 1/60 縮尺、全体図の縮尺は 1/200 とし、挿図中にスケールを付している。遺物実測図の縮尺は 1/3～1/4 縮尺とし、図中にスケールを付し、遺物写真も同様の縮尺としている。
3. 遺構および土器の色調観察は『新版 標準土色帳』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 1995 年後期版）に従っている。
4. 本書掲載の第 1 図は、高崎市発行の 1/2,500 「高崎市都市計画基本図」、第 2 図は、国土地理院発行 1/200,000 地勢図「長野」・「宇都宮」、第 3 図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図「高崎」を引用し一部改変している。
5. 遺構の略称は、住居跡：S I、掘立柱建物跡：S B、井戸跡：S E、溝跡：S D、土坑：S K、ピット：P、性格不明遺構：S Xとした。

目次

例言 凡例 目次

I 調査に至る経緯	1	2 住居跡	7
II 遺跡の地理的・歴史的環境		3 掘立柱建物跡	8
1 地理的環境	2	4 井戸跡	8
2 歴史的環境	2	5 溝跡	9
III 調査の方法と経過		6 土坑	10
1 調査の方法	5	7 ピット	11
2 調査の経過	5	8 性格不明遺構	11
IV 基本層序	7	9 遺構外の出土遺物	12
V 遺構と遺物		VI 成果と問題点	12
1 遺跡の概要	7	写真図版 抄録 奥付	

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第11図 S D - 1 遺構図	9
第2図 遺跡の位置図	2	第12図 S K - 1 遺構図	10
第3図 周辺の遺跡	3	第13図 S K - 2 遺構図	10
第4図 剣崎東村遺跡全体図	6	第14図 S K - 3 遺構図	10
第5図 基本層序模式図	7	第15図 S K - 3 出土遺物	10
第6図 S I - 1 遺構図	8	第16図 S K - 4 遺構図	11
第7図 S I - 1 出土遺物	8	第17図 ピット遺構図	11
第8図 S B - 1 遺構図	8	第18図 S X - 1 遺構図	12
第9図 S E - 1 遺構図	9	第19図 遺構外出土遺物	12
第10図 S E - 1 出土遺物	9		

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4	第2表 ピット一覧表	11
--------------	---	------------	----

写真図版目次

図版1 調査区遠景・全景	図版4 調査区南・東側全景、発掘調査風景、S
図版2 基本層序、S I - 1・S B - 1・S E - 1・ S D - 1 全景・土層断面	I - 1・S E - 1・S K - 3・遺構外出土遺物
図版3 S K - 1・2・3 全景・土層断面、S X - 1 全景・土層断面	

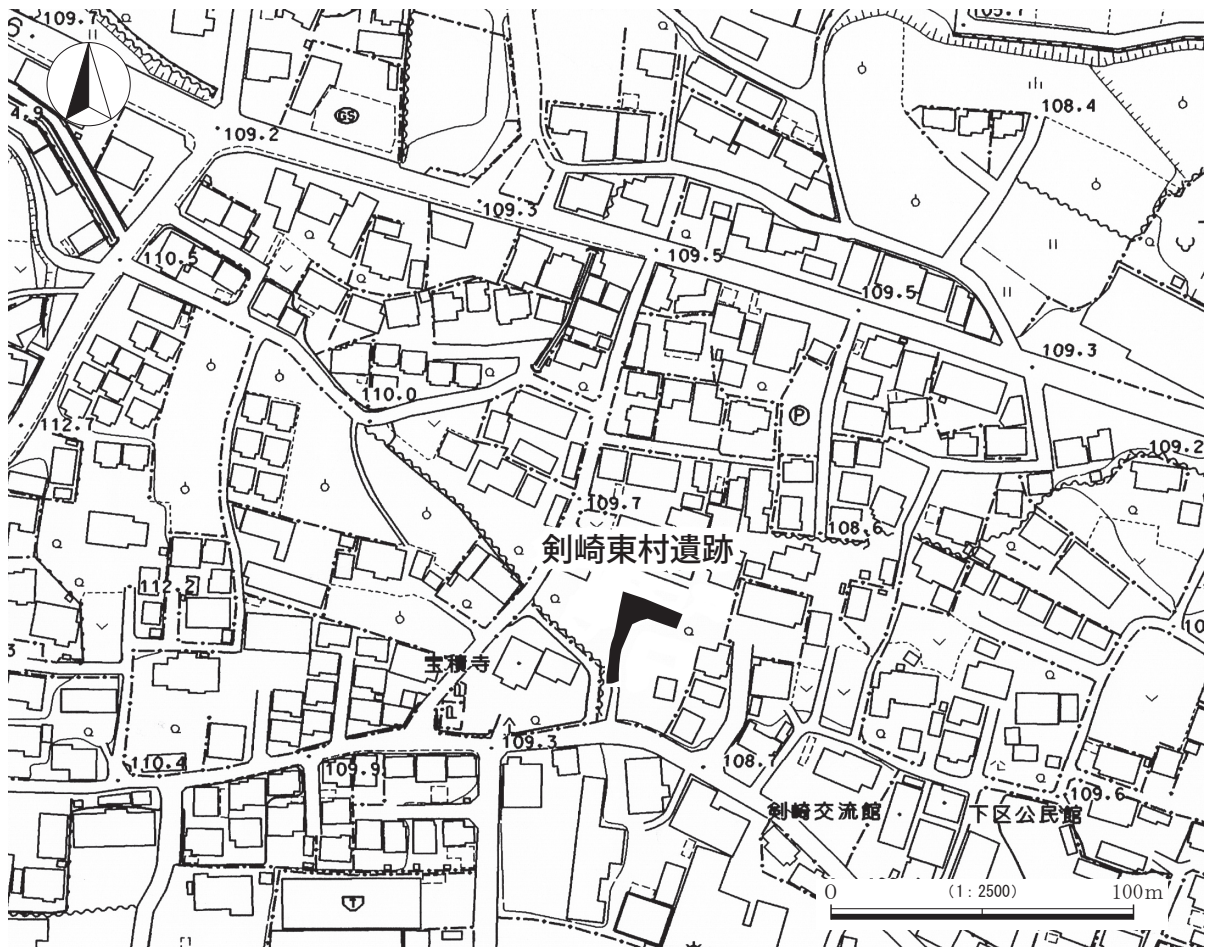
I 調査に至る経緯

平成30年1月、株式会社榛名土地（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に分譲住宅建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地が埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査による確認を実施し、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨の回答をした。

平成30年1月19日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年2月22日に工事予定地の試掘調査を実施した。その結果、堅穴建物1棟、溝1条、集石遺構が検出された。

試掘結果を基に埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということで、開発予定地の道路部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成した調査仕様書に基づく、指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所（以下委託者）に委託して実施することとなり、平成30年4月3日付けで高崎市教育長・事業者・委託者の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成30年4月5日付けで事業者と委託者の二者で発掘調査委託契約が締結された。その内容は、調査面積333.72㎡で、発掘調査が平成30年4月16日から5月31日、整理作業が6月1日から平成31年1月31日までである。



第1図 調査区位置図

Ⅱ 遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境

遺跡は、高崎市役所の北西方約4kmの剣崎町962番地1他に位置する。国道406号線の剣崎町の交差点から県道群馬八幡停車場剣崎線を約270mほど南下し、東方約300m先の宝積寺東側に接している。遺跡の立地は、東流する烏川と碓井川に挟まれた八幡台地に位置する。この台地は東西に延びる小支谷により、北から剣崎支台、若田支台、八幡支台、さらに剣崎支台から東方に延びる豊岡支台に区別される。このうち、北側の剣崎支台東端に本遺跡は占地し、標高は108m～110m前後を測る南傾斜地に展開している。



第2図 遺跡の位置図

歴史的環境

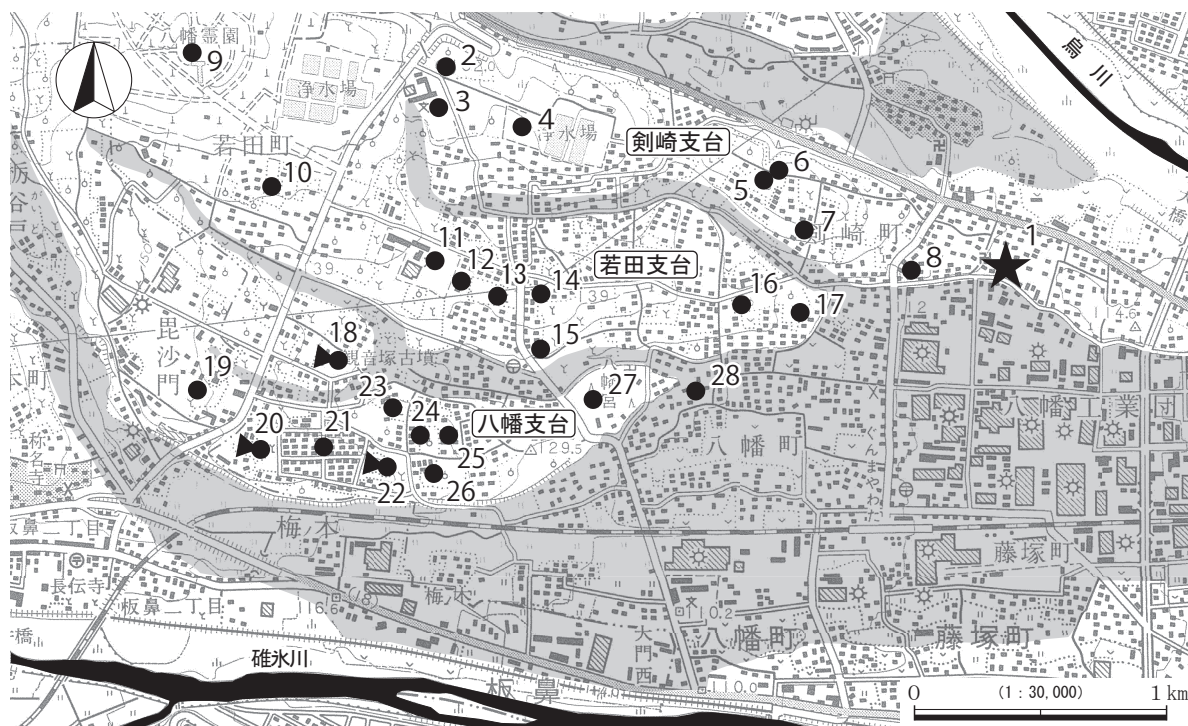
剣崎東村遺跡が位置する八幡台地は、県内最大級の横穴式石室を有する観音塚古墳をはじめとする平塚古墳・剣崎長瀬西古墳・八幡二子塚古墳など著名な古墳が古くから知られている。ここでは、剣崎支台、若田支台、八幡支台に占地する遺跡を時代順に概観(第3図、第1表)してみたい。

剣崎支台で最も古い遺跡は、標高140mの最も高い場所に占地する剣崎長瀬西遺跡(4)である。ここからは縄文時代草創期・早期の土器・石器が出土している。前期になると、遺跡は支台の東側の緩斜面に移り、標高135mあたりの剣崎稲荷塚遺跡(5)、剣崎稲荷塚遺跡3(6)、剣崎稲荷塚遺跡2(7)で住居跡が検出され、同一の集落と推定される。中期は大島原遺跡(3)と西側に隣接する剣崎長瀬西遺跡(4)で住居跡が検出され、同一の集落とされる。弥生時代後期は、78軒の住居跡が検出された剣崎長瀬西遺跡(4)が拠点集落と推定され、東方に剣崎稲荷塚遺跡3(6)で住居跡2軒、剣崎稲荷塚遺跡2(7)で住居跡2軒が検出されている。その後の古墳時代においても剣崎長瀬西遺跡(4)は中心的な存在で、県内においても際立った特徴を有している。それは住居跡52軒中、14軒から韓式系土器が出土している。また、遺跡の西側に占地する5世紀後半の剣崎長瀬西古墳(2)を中心に方墳3基、積石塚5基、馬埋葬土坑1基が検出され、方墳から金製垂飾付耳飾が出土している。これらの状況から朝鮮半島からの渡来人、あるいはその末裔による集落の可能性が指摘されている。なお、最初に出現する古墳は、支台の舌状端部に造られた剣崎天神山古墳(8)である。主体部からは琴柱・鏡・埴・槽・杵・鎌・斧・刀子等の石製模造品が出土している。継続する剣崎長瀬西古墳(2)

も同様に、主体部から石製模造品の鏡・勾玉・白玉・斧・鎌・刀子、短甲、矛、石突、振文鏡が出土している。その後の7世紀代の古墳も剣崎長瀬西遺跡(4)で17基の円墳が発掘調査されている。奈良時代以降は、剣崎稻荷塚遺跡(5)、剣崎稻荷塚遺跡3(6)、剣崎稻荷塚遺跡2(7)で住居跡が検出されているが、連続とした同一集落の可能性はある。

若田支台は八幡台地の中央に位置し、縄文時代前期から遺跡が出現する。中でも標高156mに位置する若田原遺跡群(9)は、縄文時代前期から後期の住居跡27軒(柄鏡型住居が2軒)が発掘調査され、この支台の拠点集落と言える。このほか、前期の住居跡を検出した若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡(10)がある。古墳時代になると、遺跡は支台の東側に集中し標高140m付近に占地する八幡中原遺跡が拠点集落となる。この集落の特徴は韓式系土器や石製模造品を有する住居跡があり、特に石製模造品を出土する住居跡が多いことがあげられる。詳しくみると、八幡中原遺跡第1次調査地点(11)では石製模造品を持つ住居跡が6軒、韓式系土器を持つ住居跡が2軒検出されている。八幡中原遺跡第2次調査地点(12)では石製模造品を持つ住居が41軒、韓式系土器を持つ住居が4軒検出している。八幡中原遺跡第3～6次調査地点(13)でも石製模造品・韓式系土器を持つ住居跡、七五三引遺跡(14)でも石製模造品・韓式系土器を持つ住居跡が検出している。そのほか支台の舌状部に占地する剣崎六万坊遺跡(16)でも集落が確認されている。古墳は若田原遺跡群(9)で5基の古墳が調査されている。このうち5世紀末の竪穴式石室を有する若田大塚古墳(副葬品に横板板鋸留式短甲、槍、矛)、6世紀前半の無袖型横穴式石室を有する檜ノ木塚古墳(副葬品に水晶製丸玉)、7世紀代の峯林古墳が保存されている。そのほか7世紀代の若田B古墳では横穴式石室に刀子・鉄鎌・兵庫鎖・金銅製毛彫杏葉が副葬されていた。奈良時代では八幡中原遺跡第2次調査地点(12)から溝持ち礎石の掘立柱建物1棟、八幡中原遺跡第3～6次調査地点(13)から基壇状遺構1棟、礎石建物1棟が検出されている。中世以降になると、支台の舌状部に八幡宮ノ遺跡(15)の掘立柱建物5棟、鳴熊城(17)が建てられる。特に鳴熊城は柴田三衛門勝重が城主で徳川家康より拝領したと言われている。

八幡支台は、八幡台地の南側に位置する支台で、碓氷川の北にあたる。標高136m～138mに占地する八幡遺跡(21)は、弥生時代後期から平安時代までの複合遺跡で、この支台の拠点集落と推定される。弥生時



第3図 周辺の遺跡

代後期の住居跡は52軒あり、祭祀を推測させる特殊遺構から小形銅製釧を出土している。このほか四ノ市遺跡(23)からも住居跡が検出されている。続く、古墳時代においても八幡遺跡(21)から43軒の住居跡が発掘調査され、祭祀遺構からは子持勾玉が出土している。そのほか、八幡六枚遺跡(24)からも住居跡から石製模造品の剣・有孔円板が出土している。

また、八幡遺跡(21)は古墳群としても古くから著名な地域である。5世紀後半の舟形石棺を有する前方後円墳の平塚古墳(20)や帆立貝式古墳の龍的塚古墳(19)、6世紀前半の前方後円墳である八幡二子塚古墳(22)、6世紀末の前方後円墳である観音塚古墳(18)が占拠している。その中でも観音塚古墳は県内最大級の横穴式石室を有し、内行花文鏡や銀装大刀・銅鏡、銅承台付蓋鏡等を副葬する首長墓クラスの前方後円墳である。また、これらの古墳に囲まれた地域に円墳23基(堅穴系主体部1基、横穴式石室22基)が発掘調査されている。平安時代になると、八幡六枚遺跡2(25)から「片罡郡」刻書須恵器が住居から出土している。中世になると、支台の東側に、関東管領上杉顕定が築いたと言われている八幡館(26)や支台の舌状部先端に武田信玄に関連する八幡神社(27)、剣崎小路城(28)がみられる。

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	概要
1	剣崎東村遺跡	高崎市剣崎町字東村	縄文時代～近世	中世住居1、中世～近世の土坑4・井戸1
2	剣崎長瀬西古墳	高崎市剣崎町字長瀬西	5世紀後半	全長35.5mの帆立貝式古墳、墳頂主体部より短甲、矛、石突、振文鏡、石製模造品の鏡・勾玉・白玉・斧・鎌・刀子、テラス面より堅穴式石槨
3	大島原遺跡	高崎市八幡町字大島原	縄文時代～古墳時代	縄文時代中期住居3、古墳時代住居14、古墳7、祭祀遺構1
4	剣崎長瀬西遺跡	高崎市剣崎町字長瀬西	縄文時代草創期～奈良時代	縄文時代中期住居3、弥生時代後期住居78、古墳時代住居52、このうち14軒から韓式系土器出土、5世紀後半の方墳3、積石塚5、円墳8、小石塚2、7世紀代の円墳17、祭祀遺構1、馬埋葬土坑1、方墳から金製垂飾付耳飾
5	剣崎稲荷塚遺跡	高崎市剣崎町字稲荷塚	縄文時代～平安時代	縄文時代前・中・後期住居各1、平安時代住居13、このうち平安時代の住居から小銅像2体出土
6	剣崎稲荷塚遺跡3	高崎市剣崎町字稲荷塚	縄文時代～平安時代	縄文時代前期住居5、弥生時代後期住居2、平安時代住居8
7	剣崎稲荷塚遺跡2	高崎市剣崎町字稲荷塚	縄文時代～平安時代	縄文時代前期住居4、弥生時代後期住居2、古墳時代住居21、奈良・平安時代住居4
8	剣崎天神山古墳	高崎市剣崎町字	5世紀前半	径30mの円墳、主体部から石製模造品の琴柱形石製品・鏡・埴・槽・杵・鎌・斧・刀子が出土
9	若田原遺跡群	高崎市若田町字峯林・大塚	縄文時代～古墳時代	若田原遺跡 縄文時代前期～後期の住居27(敷石住居2)、土坑30 八幡霊園内古墳群 若田大塚古墳(堅穴式石室):径29.5mの円墳、副葬品に横柄板鋸留式短甲、槍、矛 峯林古墳(横穴式石室):径17.6mの円墳 檜ノ木塚古墳(横穴式石室):径17.5mの円墳、副葬品に水晶製丸玉
10	若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡	高崎市若田町字屋敷裏	縄文時代～平安時代	縄文時代前期住居1、古墳～平安時代住居27、掘立柱建物7
11	八幡中原遺跡第1次調査地点	高崎市八幡町字中原	古墳時代～平安時代	住居39、掘立柱建物2、土坑、溝、石製模造品出土住居6、韓式系土器出土住居2
12	八幡中原遺跡第2次調査地点	高崎市八幡町字中原	旧石器時代～平安時代	住居137、掘立柱建物34、井戸2、石製模造品出土住居41、このうち、子持勾玉出土住居2、韓式土器出土住居4、溝持ち礎石の掘立柱建物1
13	八幡中原遺跡第3～6次調査地点	高崎市八幡町字中原	縄文時代～奈良時代	3次調査:古墳時代～平安時代住居10、掘立柱建物2、基壇状遺構1、溝1 4次調査:古墳時代住居8、奈良時代掘立柱建物2・溝5・土坑8、5世紀後半の住居から韓式系土器、石製模造品が出土 5・6次調査:古墳時代住居10、住居から石製模造品の勾玉・剣、奈良時代礎石建物1
14	七五三引遺跡	高崎市八幡町字七五三	古墳時代中期～後期	住居7、土壇状遺構1、住居から石製模造品・韓式系土器出土
15	八幡宮ノ遺跡	高崎市八幡町字宮ノ後	古墳時代～近世	古墳時代住居1、中世～近世の掘立柱建物5・土坑18
16	剣崎六万坊遺跡	高崎市八幡町六万坊	縄文時代～古墳時代	縄文時代中期埋葬、古墳時代住居18
17	鳴熊城	高崎市剣崎町字鳴熊・六万坊・上小路	中世～近世	伝えによれば天正18(1591)年または慶長4(1599)年に柴田三衛門勝重が城主、徳川家康より碓井・群馬の2郡に2,000石を拝領
18	観音塚古墳	高崎市八幡町字後観音	6世紀末	全長97mの前方後円墳、県内最大級の玄室規模、副葬品に内行花文鏡、画文帯神獸鏡、獸形鏡、五鈴鏡、銀釧、銀装大刀(圭頭・鶏冠頭)、銀製弭、掛甲小札、馬具、銅鏡、銅承台付蓋鏡、鉄斧、鉋、鑿、須恵器など
19	龍的塚古墳	安中市板鼻字毘沙門	5世紀後半	全長20mの帆立貝式古墳、堅穴式石室
20	平塚古墳	高崎市八幡町字毘沙門	5世紀後半	全長105mの前方後円墳、後円部墳頂に凝灰岩製の舟形石棺2
21	八幡遺跡	高崎市八幡町字毘沙門	弥生時代～平安時代	弥生時代後期住居52、土壇墓7、古墳時代住居43、周溝墓1、古墳23、子持勾玉等を出土した祭祀遺構1、奈良・平安時代住居13
22	八幡二子塚古墳	高崎市八幡町字二子塚	6世紀前半	全長66mの前方後円墳、墳丘に葺石を施し、円筒、人物、馬等の埴輪を設置
23	四ノ市遺跡	高崎市八幡町	弥生時代～奈良時代	弥生時代住居1、古墳時代住居5、奈良時代小鍛冶1
24	八幡六枚遺跡	高崎市八幡町字六枚	弥生時代～平安時代	弥生時代～平安時代住居52、このうち古墳時代の住居から石製模造品の剣・有孔円板
25	八幡六枚遺跡2	高崎市八幡町字六枚	古墳時代～平安時代	古墳時代住居4、奈良・平安時代住居6、このうち平安時代の住居から「片罡郡」刻書須恵器
26	八幡館	高崎市八幡町字館	中世	文亀2(1502)年の『談柄』によれば、「顕定御館」の記事があり、上杉顕定が築いたと推測
27	八幡神社	高崎市八幡町字上馬場	中世	武田信玄が本陣を築いたとの伝承があり、300m×190mの縄張りで城郭の構え
28	剣崎小路城	高崎市剣崎町字鳴熊・六万坊	中世～近世	伝えによれば永正4(1507)年ごろ福田忠政(政忠)が築城、その子加賀守信義(倉賀野16騎)は若田ヶ原の戦いに功あり、武田信玄より剣崎、藤塚、豊岡の地を拝領

Ⅲ 調査の方法と経過

調査の方法

発掘調査は、試掘調査の結果に基づきバックフォア 0.25 m²により表土掘削した後、遺構の掘り下げを行った。遺構の測量及び写真記録は、調査の進捗状況に応じ適時行っている。測量については、GNSSによる観測で基準点・水準点を設置し、平面図をトータルステーション、断面図を基準点からの測り込みにより作成した。なお、遺構の平面図・断面図の縮尺は1/20を基本にしている。また、写真記録については、35 mm白黒フィルム・35 mmカラーリバーサル・デジタルカメラ NikonD750(2432 万画素)を使用し、全体写真はドローン(マルチコプター)による空撮を行った。

整理作業は、遺構図面の修正後に第二原図を作成し、遺構ごとに Adobe illustrator CS 6によりデジタルトレースを行った。出土遺物は、水洗・注記後にセメダインCを使い接合し、補強材にエポキシ系樹脂バイサムを使用した。遺物写真はN ikonD750(2432 万画素)を使用し、Adobe Photoshop CS6により縮尺・トリミングを行っている。その後、遺物実測を行い、Adobe illustrator CS 6によりデジタルトレースを行った。

編集作業はデジタル化した図面・写真と原稿を Adobe indesign CS 2で行い、報告書作成を行った。

調査の経過

発掘調査 (平成 30 年 4 月 14 日～5 月 11 日)

平成 30 年 4 月 14 日 発掘器材運搬・調査区設定・重機の搬入。

4 月 16 日 重機による掘削及び遺構確認作業を実施。仮設トイレの設置。

4 月 19 日 重機による掘削作業及び掘削土の整地作業終了。

4 月 20 日 高崎市教育委員会と現地打合せ後、遺構の掘り下げを開始する。

5 月 7 日 高崎市教育委員会より現地調査の終了検査を受ける。

5 月 8 日 空撮及び遺構記録作業の終了。

5 月 9 日 重機による埋め戻し作業実施。発掘器材の撤収。

5 月 11 日 重機の搬出・仮設トイレ撤去。

遺物整理 (平成 30 年 5 月 14 日～平成 31 年 1 月 31 日)

平成 30 年 5 月 14 日 遺物の水洗・注記、遺構図面の整理作業を開始する。

5 月 21 日 遺物の写真撮影。

5 月 22 日 遺物実測及び拓本。

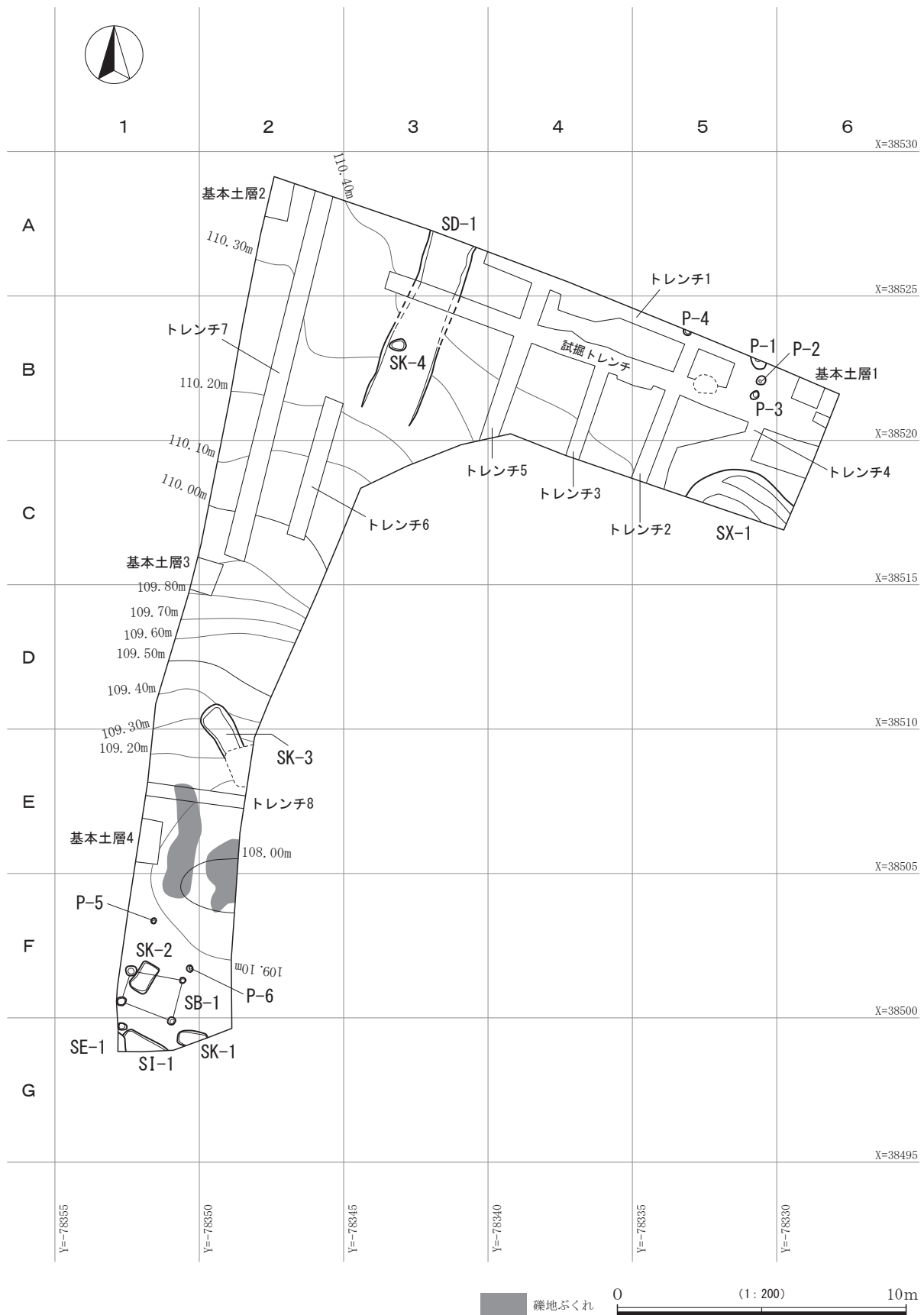
11 月 28 日 遺物実測図のトレースを開始する。

12 月 5 日 鉄製品の実測及び写真撮影。

平成 31 年 1 月 8 日 報告書編集作業を開始する。

1 月 15 日 報告書の印刷を行う。

1 月 31 日 報告書を刊行する。



第4図 剣崎東村遺跡全体図

IV 基本層序

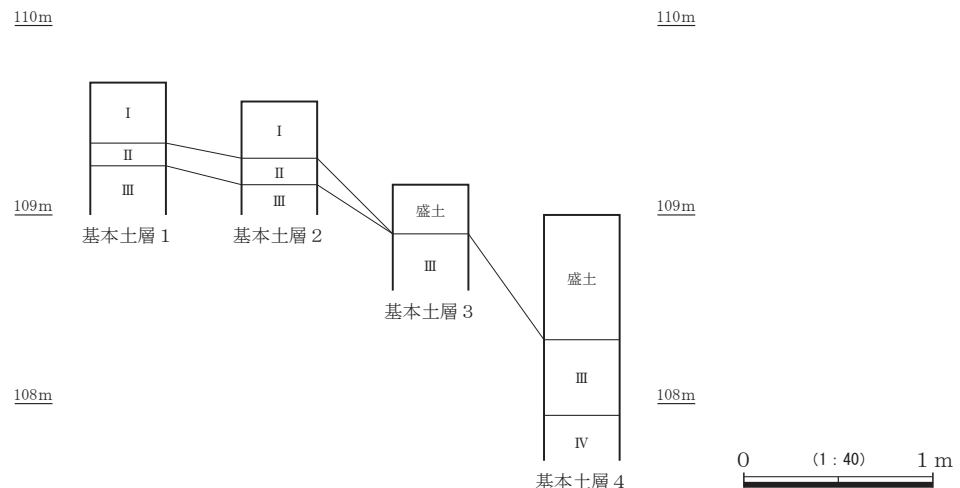
遺跡地が南傾斜地に占地しているため、基本層序は標高が高いA-2・B-6グリッドの2か所、中位のC-2グリッド、低いE-1グリッドの合計4か所で確認を行った。その結果、調査地全体は以前あった住宅建設および住宅の解体に伴いA～C-2～6グリッド間は掘削が進んでいた。また、傾斜地となるD～G-1・2グリッド間は整地作業後に、数回に亘る盛土施工が行われ地表面が嵩上げされていることが判明した。観察の結果（第4図）は以下のとおりである。

I層 暗褐色土層(10YR3/4) As-A(浅間A軽石)φ0.5cmを中量、炭化物を少量、黄褐色軽石φ0.5cm以内を微量に含む。しまりやや強く、粘性は弱い。耕作土。

II層 黒色土層(10YR17/1) 白色軽石φ0.3cmを中量、黄褐色軽石φ0.5cm以内・炭化物・焼土を少量含む。硬くしまり、粘性が強い。

III層 明黄褐色土(10YR6/6) As-YP(浅間板鼻黄褐色軽石)φ0.5cm内外を多量に含み、炭化物を微量に含む。しまりがあり。粘性やや強く、鉄分凝集の沈着が顕著である。

IV層 灰色砂質土層(2.5GY5/) 上面に砂粒を多量に含み、礫φ3.0～10.0cmの礫層となる。



第5図 基本層序模式図

V 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

今回の調査で、住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡1条、土坑4基、ピット6基を検出した。これらの遺構の時期は中世から近代のもので、集落の一部と推定される。そのほか、遺構外から縄文時代の土器・石器の剥片が出土しているため、調査地東側に縄文時代の包蔵地が広がると推定される。

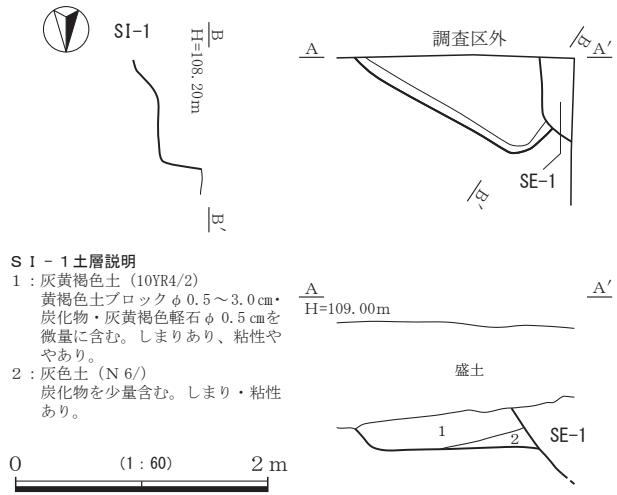
2. 竪穴住居跡

S I-1 (第6・7図、図版2・4)

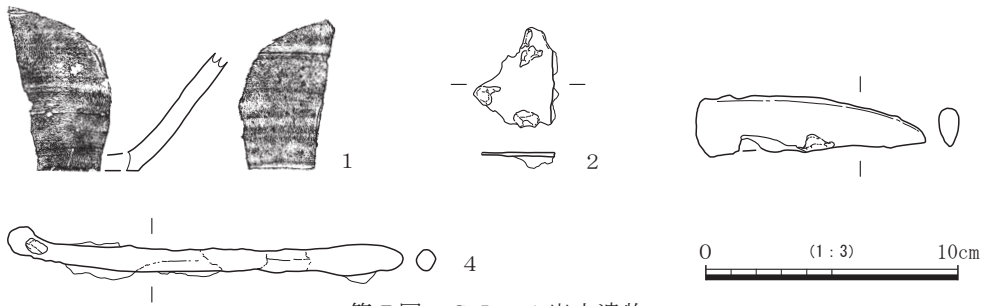
位置 G-1グリッドに位置し、住居南側は調査区外である。平面形態 方形または長方形と推定される。

新旧関係 住居の西側でSE-1と重複し、本遺構がSE-1より古い。長軸方位 不明。規模 長軸

(158) cm、短軸(77) cm。残存壁高(30) cm。遺構埋没状態 自然堆積。上面が整地作業により削平され、少なくとも3回以上の盛土施工が行われ状態が悪い。遺物出土状態 覆土1層から鉄製品等の遺物が出土している。遺物 1は瓦質土器の播鉢でロクロ成形による。色調は灰色(N 5/)を呈し、胎土に絹雲母粒子を多量に含み、海面骨針を少量含む藤岡産製品である。2～4は鉄製品である。2は長さ(4.0) cm、幅(3.2) cm、厚さ0.3 cm、重量(6) gの平板状の製品で用途不明。3は長さ(9.1) cm、最大幅(2.3) cm、厚さ0.8 cm、重量(19.75) gで、刀子または鎌と推定される。4は長さ(15.7) cm、幅1.0 cm、厚さ0.8 cm、重量(35.78) gの大きさで、断面形態が楕円形を呈する棒状製品で用途不明。時期 中世の帰属と推定される。



第6図 SI-1遺構図

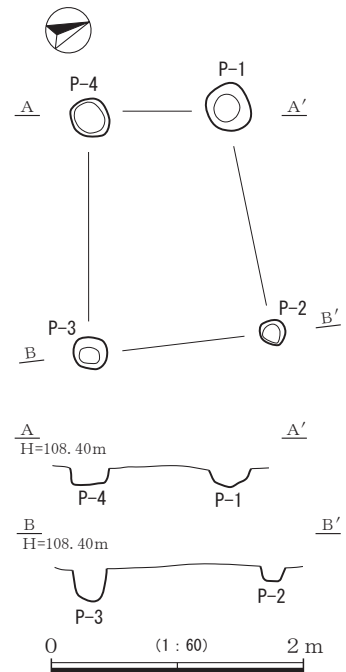


第7図 SI-1出土遺物

3. 掘立柱建物跡

SB-1 (第8図・図版2)

位置 F・G-1グリッドに位置する。平面形態 台形。新旧関係 SK-2と重複するが新旧関係は不明。長軸方位 N-75°-W。規模 梁1.10m~1.45m、桁1.84mを測る。柱穴はP1が長軸37cm、短軸34cm、深さ14cm。P2が長軸22cm、短軸20cm、深さ14cm。P3が長軸27cm、短軸25cm、深さ25cm。P4が長軸30cm、短軸29cm、深さ14cmである。遺構埋没状態 自然堆積。時期 中世から近代の帰属と推定される。



第8図 SB-1遺構図

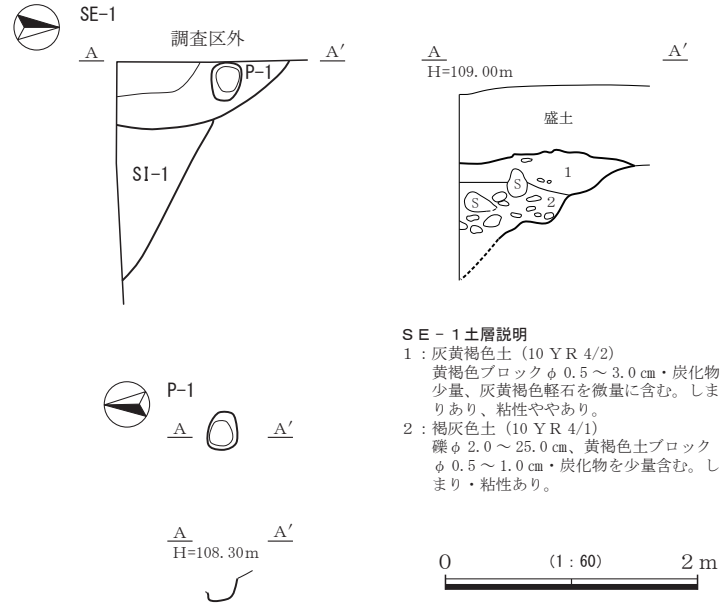
4. 井戸跡

SE-1 (第9・10図、図版2・4)

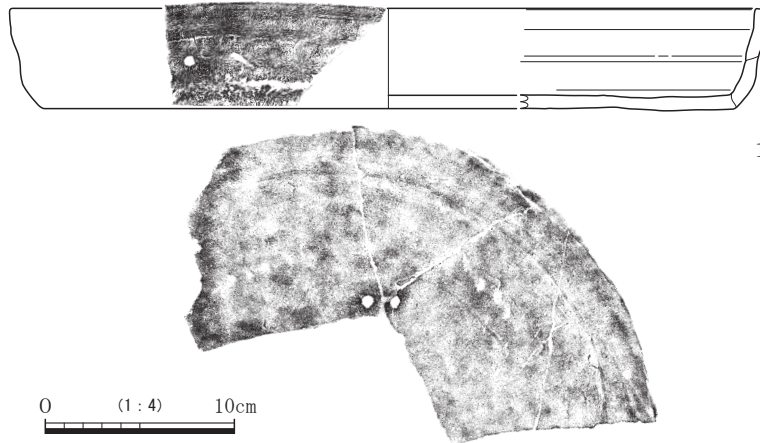
位置 G-1グリッドに位置し、大半は調査区外である。平面形態 円形と推定される。断面形 ロート状と推定される。新旧関係 SI-1と重複し、本遺構がSI-1より新しい。規模 長軸(132)cm、短軸(52)cm。残存深度(52)cm。構築状況 本体は素掘り、脇に柱穴が附随する。P1は長軸31cm、短軸23cm、深さ17cmを測る。遺構埋没状態 2層中に大量の礫が人為的に投機されている。遺物出土状態 礫と共に焙烙等の遺物も投棄された状態で出土。出土遺物 図示で来たのは1の内

耳系焙烙である。色調はにぶい橙色を呈し、口径 40 cm、底径 36.6 cm、器高 5.3 cm を測る。内面は灰白色 (10YR8/1) で、外面に煤が付着する。胎土は精選された粘土で白色粒子を少量含んでいる。底面は平底で型作りに伴うちぢれ目が残る。体部は垂直気味に立ち上がり、底部との接合部は指押さえ後にヨコナデを施している。なお、体部と底部には各 1 か所補修孔が穿たれている。

時期 出土遺物から 18 世紀代に帰属する。



第 9 図 SE - 1 遺構図

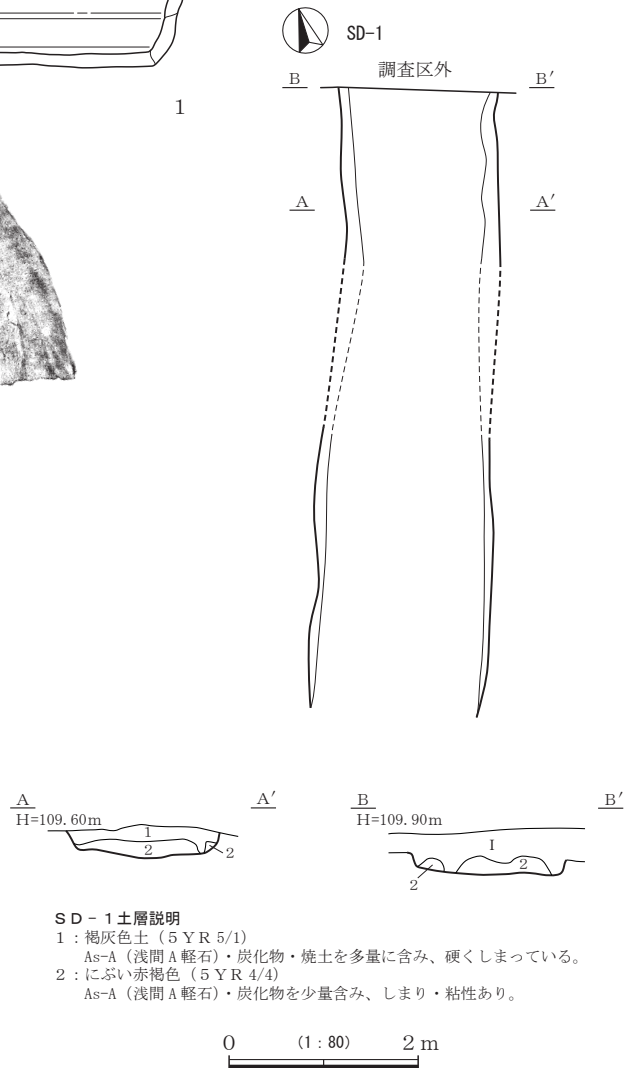


第 10 図 SE - 1 出土遺物

5. 溝跡

SD-1 (第 11 図、図版 2)

位置 A・B-3 グリッドに位置し、北側は調査区外である。南側は削平により滅失している。**新旧関係** SK-4 と重複し、本遺構が SK-4 より新しい。**底面の標高** 109.20 m ~ 109.13 m。**走行方向** N-20° - E。**断面形態** 逆台形。**規模** 最大幅は上端部 2.1 m、下端部 1.7 m。最小幅は上端部 1.7 m、下端部 1.3 m、確認長 6.6 m。**残存深度** 36 cm。**遺構埋没状態** 自然堆積。**遺物出土状態** 1 層上位から唐草瓦 (軒瓦) が出土している。**時期** 近世から近代の帰属と推定される。



第 11 図 SD - 1 遺構図

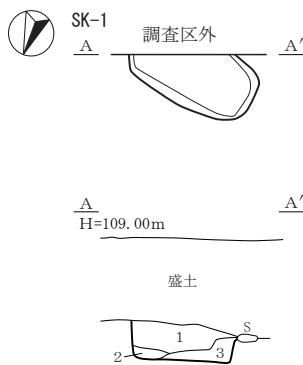
6. 土坑

SK-1 (第12図、図版3)

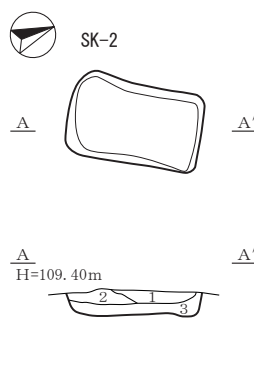
位置 G-1・2グリッドに位置し、南側は調査区外である。**平面形態** 隅丸長方形。**断面形態** 箱型。**長軸方位** N-84°-W。**規模** 長軸(106)cm、短軸(54)cm、深さ(30)cm。**遺構埋没状態** 自然堆積。**遺物出土状態** 覆土内から土師器片が出土している。**遺物** 6世紀後半の土師器坏片2点が出土している。うち1点は内黒処理をした坏である。これらの遺物は6世紀後半に帰属するもので、後世の流れ込みと推定される。**時期** As-A(浅間A軽石)が覆土に混入することから18世紀後半以降の帰属と推定される。

SK-2 (第13図、図版3)

位置 F-1グリッドに位置する。**平面形態** 長方形。**断面形態** 逆台形。**新旧関係** SB-1と重複するが新旧関係は不明。**長軸方位** N-30°-E。**規模** 長軸107cm、短軸63cm、深さ21cm。**遺構埋没状態** 自然堆積。**遺物出土状態** 覆土内から陶磁器片が出土している。**時期** 幕末以降の帰属と推定される。



第12図 SK-1 遺構図



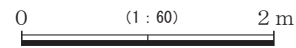
第13図 SK-2 遺構図

SK-1 土層説明

- 1: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色土ブロックφ0.5~4.0cm多量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物を少量含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
- 2: 灰黄褐色土(10 YR 4/2)
黄褐色土ブロックφ0.5~5.0cm多量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 3: 灰黄褐色土(10 YR 4/2)
黄褐色土ブロックφ0.5cm少量、礫φ3.0cm微量に含む。しまりあり。粘性ややあり。

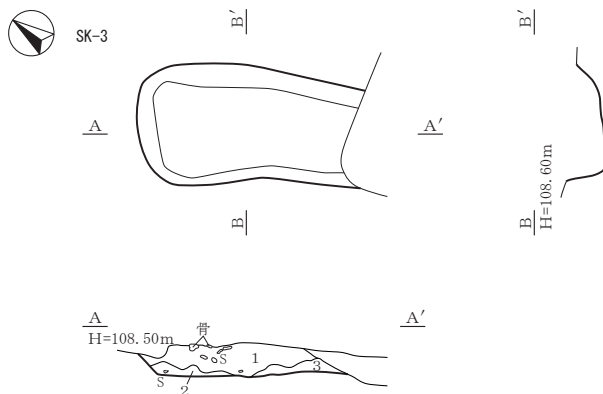
SK-2 土層説明

- 1: 褐灰色土(10 YR 4/1)
As-A(浅間A軽石)φ0.5cm中量、炭化物少量、黄褐色土ブロックφ1.0cm微量含む。しまりあり。粘性あり。
- 2: 褐灰色土(10 YR 4/1)
As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物少量、黄褐色土ブロックφ0.5cm微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 3: 褐灰色土(10 YR 4/1)
黄褐色土ブロックφ0.5~1.0cm中量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。



SK-3 (第14・15図、図版3・4)

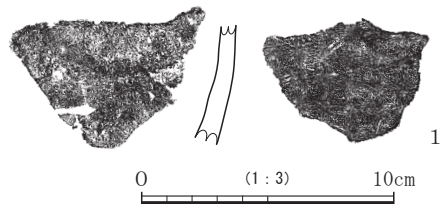
位置 D・E-2グリッドに位置し、東側は後世の掘削により滅失している。**平面形態** 長方形。**断面形態** 逆台形。**長軸方位** N-33°-W。**規模** 長軸(166)cm、短軸85cm、深さ(25)cm。**遺構埋没状態** 人為的に埋め戻されている。**遺物出土状態** 覆土1層に馬を埋葬。歯が西側から出土しているため西向きに埋葬。**遺物** 須恵器・馬骨が出土している。1は瓦質土器の鉢で、色調は灰色(灰N5/)、胎土にチャート、白色細粒を含み、内外面にナデ調整を施している。2は馬歯で下顎の切歯。**時期** 出土遺物から中世以降の帰属と推定される。



第14図 SK-3 遺構図

SK-3 土層説明

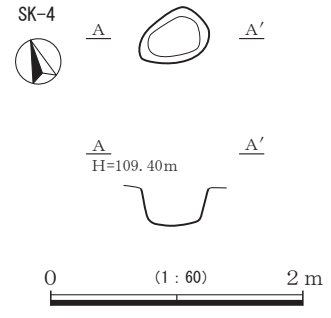
- 1: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色土ブロックφ0.5~2.0cm・白色軽石φ0.5cmを少量含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
- 2: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色土ブロックφ0.5~3.0cm中量、白色軽石φ0.3cmを少量含む。しまりややあり。粘性やや弱い。
- 3: 灰黄褐色土(10 YR 4/1)
黄褐色土ブロックφ1.0~4.0cm中量、白色軽石φ0.3cmを少量含む。しまりややあり。粘性やや弱い。



第15図 SK-3 出土遺物

SK-4 (第16図)

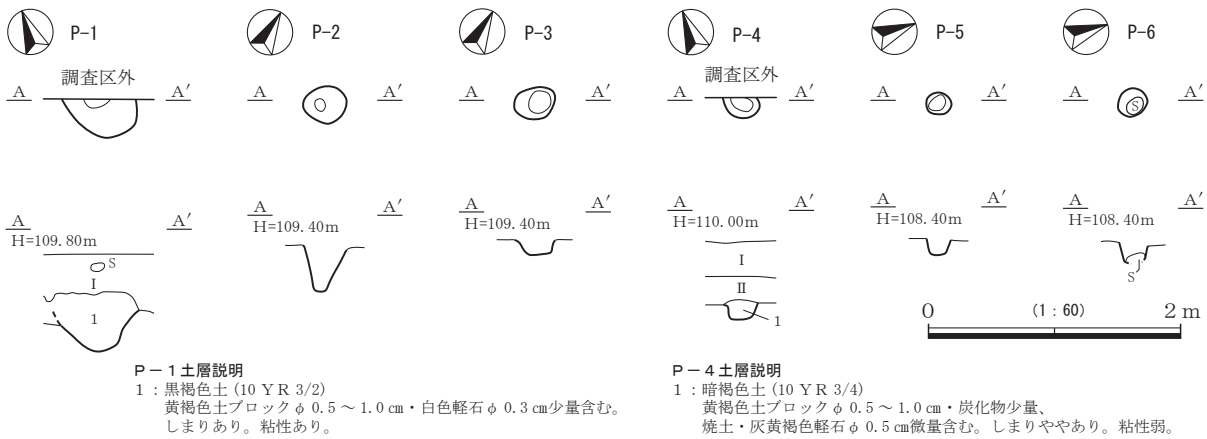
位置 B-3グリッドに位置する。平面形態 楕円形。断面形態 箱形。
 新旧関係 SD-1と重複し、本遺構がSD-1より新しい。長軸方位
 N-78°-W 規模：長軸55cm、短軸42cm、深さ26cm。時期 SD
 -1より古いため、近世に帰属すると推定される。



第16図 SK-4遺構図

7. ピット

調査区の東側B-5グリッド、南側のF-1グリッドの2か所から合計6基(第17図)が検出されている。覆土の堆積状況からP-1・4は縄文時代前期と推定される。概要は第3表のピット一覧表のとおりである。



第17図 ピット遺構図

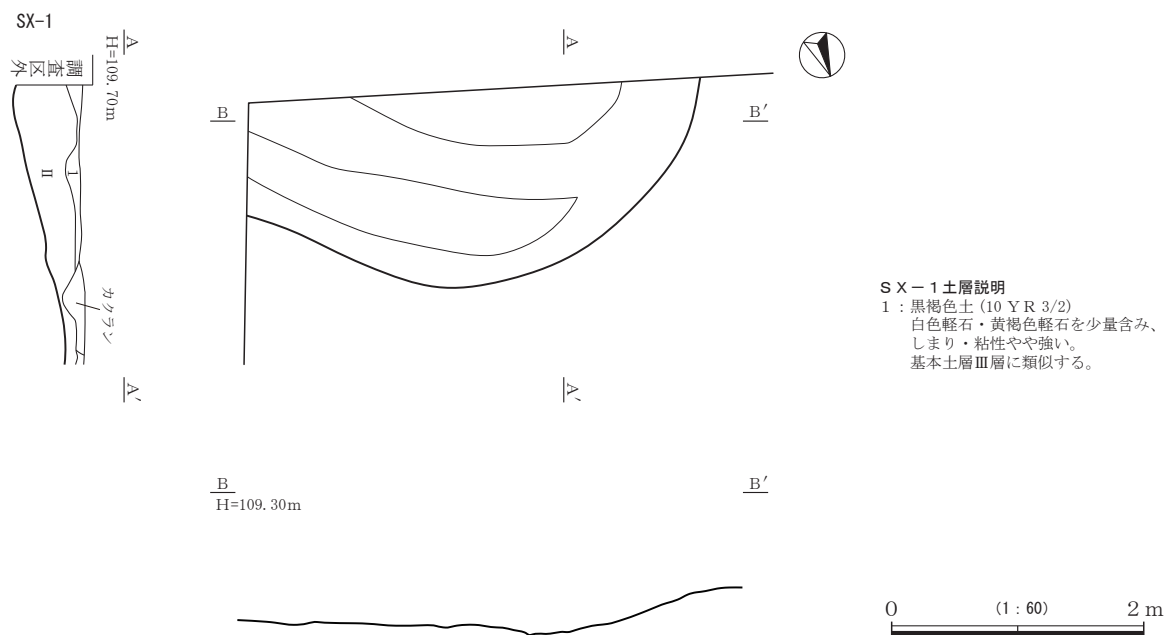
第2表 ピット一覧表

遺構名	位置	平面形態	断面形状	規模 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
P-1	B-5グリッド	楕円形	弧状	(45) × (45)	27	縄文時代前期	土坑の可能性あり
P-2	B-5グリッド	楕円形	逆台形	33 × 30	36		
P-3	B-5グリッド	楕円形	逆台形	34 × 25	12		
P-4	B-5グリッド	楕円形	逆台形	(25) × (16)	14	縄文時代前期	
P-5	F-1グリッド	楕円形	逆台形	20 × 17	13		
P-6	F-1グリッド	楕円形	逆台形	24 × 21	17		底面に礫を敷く

8. 性格不明遺構

SX-1 (第18図、図版3)

位置 C-5・6グリッドに位置し、東・南側は調査区外である。平面形態 楕円形と推定される。規模：
 長軸(2.85)m、短軸(1.55)m。残存深度(55)cm。遺構埋没状態 住宅の建設および解体に伴い削
 平が著しく、覆土1層の下は基本層序のⅢ層となる。調査区における等高線を考慮すると南傾斜地にあたり
 自然堆積の可能性が高いが、P-1の覆土1層に類似していること、基本層序Ⅲ層上面から縄文時代前期の
 土器が出土していること等を考慮して性格不明遺構とした。時期 縄文時代前期の帰属と推定される。

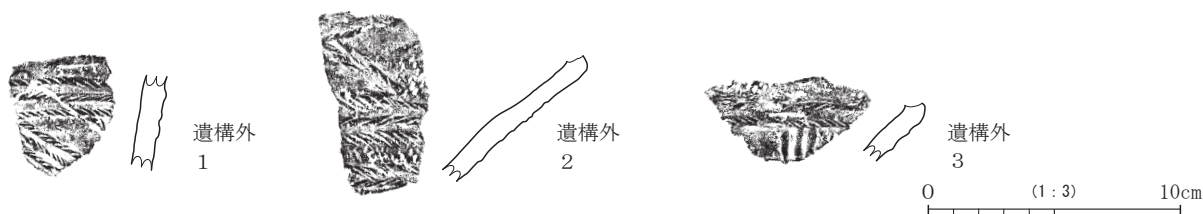


SX-1土層説明
1: 黒褐色土(10 YR 3/2)
白色軽石・黄褐色軽石を少量含み、
しまり・粘性やや強い。
基本土層III層に類似する。

第 18 図 SX-1 遺構図

9. 遺構外出土遺物

遺構外から縄文時代の土器（第 19 図、図版 4）が出土している。すべて基本層序Ⅲ層の上位から出土している。1～3は縄文時代前期の諸磯b式中段階の土器片である。1は深鉢の胴部で、色調は褐色（7.5 YR 4/6）を呈する。胎土にチャート、黄褐色粒子を含み、浮線文に矢羽状の刻みを施している。2は深鉢の口縁部で、色調は褐色（7.5 YR 4/6）を呈している。胎土にチャート、透明石英、黄褐色粒子を含み、浮線文に矢羽状の刻みを施し、単節縄文RLを横位に施している。3も深鉢の口縁部で、色調は褐色（7.5 YR 4/6）を呈している。胎土に赤色チャートを含み、浮線文に矢羽状の刻みを施している。



第 19 図 遺構外出土遺物

VI 成果と問題点

剣崎東村遺跡の調査で注目すべきことは、八幡台地の遺跡を支台ごとにみると、各支台の舌状部先端に中世以降の遺跡が占地していることである。本遺跡も同様にSI-1・SE-1・SK-3は中世以降の遺構と推定される。明治28年の『神社寺院明細帳』によれば、宝積寺は「宝剣山満福院 宝積寺 天台宗 本尊は阿弥陀如来 八幡宮の別当であった八神徳寺、大谷村（安中市）福泉寺、下室田村（榛名町）明照寺、中室田（榛名町）般若院の四か寺と共に板鼻（安中市）称名寺の末寺 安永十辛丑天（1781）3月上旬銘の須弥壇や仏具に安永二癸巳年現住寛慶（1773）」とある。『高崎市史』によれば、創建が16世紀に遡る可能性が指摘されている。この記述をもとに、18世紀代に位置付けられるSE-1は宝積寺に関連した井戸と言えよう。また、馬を埋葬したSK-3も時代的に宝積寺に関連したものと推定される。

写真図版



剣崎東村遺跡より北方の榛名山裾野を望む



剣崎東村遺跡より南方の観音山丘陵を望む



剣崎東村遺跡調査区全景

図版 2



基本層序 1



基本層序 3



基本層序 4



S I - 1 全景 (南西方向から)



S I - 1 土層断面 (北方向から)



S B - 1 全景 (北方向から)



S E - 1 全景 (東方向から)



S E - 1 出土遺物 (東方向から)



S D - 1 土層断面 (南方向から)



SK-1 全景 (北方向から)



SK-2 全景 (西方向から)



SK-2 土層断面 (東方向から)



SK-3 土層断面 (南方向から)



SK-3 全景 (西方向から)



SK-3 周辺全景 (北方向から)



SX-1 全景 (西方向から)



SX-1 土層断面 (東方向から)

図版 4



調査区南側（北方向から）



調査区南側（南西方向から）



調査区東側（西方向から）

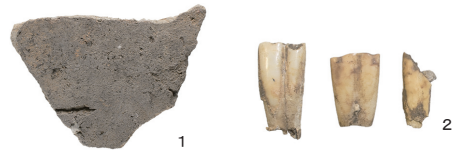


発掘調査風景

SI-1



SK-3

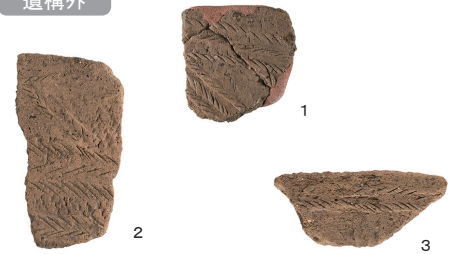


SE-1



出土遺物

遺構外



SK-3-2
(1:2) 5cm

(1:3) 10cm

SE-1
(1:4) 10cm

報告書抄録

フリガナ	ケンザキヒガシムライセキ
書名	剣崎東村遺跡
副書名	宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第412集
編著者名	志村哲・春里桃子・矢島浩
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel.027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	平成31年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
けんざきひがしむらいせき 剣崎東村遺跡	ぐんまけんたかさきし 群馬県高崎市 けんざきちやう 剣崎町962-1、 963-1・2、 964-1・2	10202	725	36° 20' 38"	138° 57' 37"	20180414 ～ 20180511	226 m ²	宅地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
剣崎東村遺跡	集落	中世 中世以降	住居跡	1軒	瓦質土器、鉄製品	
			掘立柱建物	1棟		
			井戸	1基	焙烙	
			土坑	4基	瓦質土器、馬骨	
			溝	1条		
			ピット	6基		
	包蔵地	縄文			縄文土器	

高崎市文化財調査報告書第412集

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成31年1月15日印刷

平成31年1月31日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社